

蠅を憎む記

泉鏡花

青空文庫

上

いたづら^し為たるものは金坊^{きんぼう}である。初めは稗^{ひえ}蒔^{まき}の稗^{ひえ}の、月^さ代^{かやき}のやうに素直^{こまか}に細く伸びた葉尖^{はさき}を、フツ／＼と吹いたり、臍^{ろう}たけた顔^{なが}を斜めにして、金魚鉢^{きんぎよばち}の金魚の目を、左から、又右の方^なから視^みめたり。

やがて出窓^{くだすだれ}の管^{なか}簾^まを半ば捲いた下で、腹^{はら}ンばひに成つたが、午飯^{おひる}の済んだ後^{あと}で眠氣^{ねむけ}がさして、くるりと一ツ廻^{ひと}つて、姉^{はりば}の針^{はり}箱^この方^{つむり}を頭にすると、足を投^なげて仰^{あおむき}向^{むき}になつた。

目は、ぱつちりと睜^{みひら}いて居ながら、敢^{あえ}て見るともなく針箱の中

に可愛らしい悪戯いたずらな手を入れたが、何を捜すでもなく、指に当

つたのは、ふつくりした糸巻いとまきであつた。

これを指の尖さきで撮つまんで、引ひくり返して、引出ひきだしの中で立てて見た。

然そうすると、弟が柔かな足で、くるく遊び廻る座敷であるか

ら、万一の過失あやまちあらせまい為、注意深い、優しい姉の、今しが

た店の商売あきないに一ちよいと寸部屋を離れるにも、心して深く引出ひきだしに入

れて置いた、剪刀はさみが一いっしょ所になつて入つて居たので、糸巻の動く

に連れて、夫に結いへた小さな鈴が、ちりと幽かすかに云ふから、幼い

耳みみに何か囁ささやかれたかと、弟は丸々まるまるツこい頬ほに微笑ほほえんで、頷うなずいて

鳴ならした。

鳴るのが聞えるのを嬉うれしがつて、果はては烈はげしく独楽こまのやう、糸巻

はコトコトとはずんで、指をはなれて引出の一方へ倒れると、鈴は又一つチリンと鳴った。ちいさ小な胸には、大切なものを落したやうに、大袈裟にハツとしたが、ふと心こころづ着くと、絹糸の端が有るか無きかに、指に挟はさまつて残つて居たので、うかゞひ、うかゞひ、密と引くと、糸巻は、ひらりと面おもてを返して、糸はするくくと手繰たぐられる。手繰りながら、斜ななめに、寝転んだ上へ引きく、頭こうべをめぐらして、此方こなたへ寝返ねがえりを打つと、糸は左の手首から胸へかゝつて、宙なかに中だるみし為て、目前めさきへ来たが、最もう眠いから何なんの色とも知らず。

みづかそれ自ら其を結んだとも覚えぬに、宛然さながら糸を環わにしたやうな、萌も黄えぎの円まるいのが、ちらく一ツ見え出したが、見るくくれないまじ紅が交つて、

廻ると紫になつて、颯と碎け、三ツに成つたと見る内、八ツになり、六ツになり、散々にちらめいて、忽ち算無く、其の紅なく、紫となく、緑となく、あらゆる色が入乱れて、上になり、下になり、右へ飛ぶかと思ふと左へ躍つて、前後に翻り、また翻つて、瞬をする間も止まぬ。

此の軽いものを戦がすほどの風もない、夏の日盛の物静けさ、其の癖、こんな時は譬ひ耳を押つけて聞いても、金魚の鰭の、水を掻く音さへせぬのである。

さればこそ烈しく聞えたれ、此の児が何時も身震をする蠅の羽音。

唯同時に、劣等な虫は、ぽつりと点になつて目を衝と遮つたの

で、思はず足を縮めると、直に搔き消すが如く、部屋の片隅に
 失せたが、息つく隙もなう、流れて来て、美しい眉の上。

留まると、折屈みのある毛だらけの、彼の恐るべき脚は、一
 ツ一ツ蠢き始めて、睫毛を数へるが如くにするので、予て優しい
 姉の手に育てられて、然う為た事のない眉根を寄せた。

堪へ難い不快にも、余り眠かつたから手で払ふことも為ず、顔
 を横にすると、蠅は這つて、頬の辺を下から上へ攀ぢむと為る。
 這ふ時の脚には、一種の粘糊が有るから、気だるいのを推して
 払くは可いが、悪く掌にでも潰れたら何うせう。

下

其その時ときまで未まだ些ちとは張はりの有なつた目を、半なかば閉ぢて、がつくりと仰あおむ向くと、之これがため蠅はは頬ほっぺたを嘗なめて居た嘴くちばしから糸を引いて、ぶう／＼と鳴いて飛とび上あがつたが、声も遠くには退のかず。

瞬またく間まに翼を組んで、黒点先刻さつきよりも稍やや大きく、二つが一つになつて、衝つと、細眉ほそまゆに留とまると、忽たちまちほぐれて、びく／＼と、ずり退のいたが、入交いりまじつたやうに覚えて、頬ほおの上で再び一ツ一ツに分れた。

其の都度つどヒヤリとして、針の尖さきで突くと思ふばかりの液体を、其処そこ此処こゝ滴たらすから、幽かすかに覚えて居る種痘しゅとうの時を、胸を衝つくが如くに思ひ起して、毒を射されるかと舌が硬こわばつたのである。

まあ、何処どこから襲つて来たのであらうと考へると、……其では無い。

店へ来る客の中に、過般いつか、真桑瓜まくわうりを丸ごと齧かじりながら入つた田舎者いなかもと、それから歸りがけに酒反吐さけへどをついた紳士があつた。其の事を謂いふ毎ごとに、姉は面おもてを蔽おほふ習慣なり、大方其その者等ものらの身体からだから姉の顔を掠かすめて、暖簾のれんを潜くぐつて、部屋ここまで飛込とびこんで来たのであらう、……其よ、謂いひやうのない厭いやな臭氣においがするから。

と思ふ、愈々いよいよ胸さきが苦しくなつた。其に今がつくりと仰向あおむいてから、天窓あたまも重く、耳もぼつとして、氣が遠くなつて行く。

焦じれるけれども手はだるし、足はなへたり、身動きも出来ぬ切せつ

なさ。

何を！これしきの虫と、苛いらつて、恰あたかも転ころつて来て、下まぶちの、まつげを侵おかさうとするのを、現うつにも睨ねめつける氣で、屹きつと瞳ひとみを据すゑると、いかに、普通見馴みなれた者とは大いに異り、一ひとツは鉄くろがねよりも固さうな、而そして先の尖とがつた奇なる烏帽子えぼしを頭に頂かしらき、一ひとツは灰色の大紋だいもんついた素袍すおうを着て、いづれも虫の顔つらでない。紳士と、件くだんの田舎漢いなかもので、外道面げどうづらと、鬼めんの面。——醜しゅう悪あく絶類ぜつるいである。

「あ、」と云つたが其の声咽喉のんどに沈み、しやにむに起き上らうとする途端に、トンと音が、身体中からだじゅうに響き渡つて、胸とまに留つた別に他たの一疋びきの大蠅おおばえが有つた。小兒こどもは粉米こごめの団子だんごの固くなつたの

が、よろいかぶと 鎧 甲を纏まとうて、上に跨またがつたやうに考へたのである。

たたみ 畳の左右に、はらくと音するは、我を襲びふ三疋ほかの外なるが、

なほ、とお 十ばかり。

其のあるもの 或者は、たかなみ 高波のやうに飛び、或者は網あみを投げるやうに

駆け、つ 衝と行き、さつ 颯と走つて、恣ほしいままに姉の留守の部屋を暴あらすので、

悩みわずら煩ふものは単ただ小児ばかりではない。

こだんす 小箆こだんす笥の上に飾つた箱の中の京人形は、蠅が一斉にばらくと

打撞ぶつかるごとに、がらすごし 硝子がらすごし越ながら、其の鈴のやうな美しい目を塞ふさい

だ。……柱かけの花活はないけにしをらしく咲いた姫百合ひめゆりは、羽の生え

た蛆うじが来て、こびりつく毎ごとに、懈たゆげにも、あはれ、はなびら 花片はなびらをを

のゝかして、毛けひとすじ一筋動かぜかす風もないのに、弱よわ々と頭かぶりを掉ふつた。

弟は早はや絶たえ入るばかり。

時に、壁の蔭かげの、昼も薄暗い、香こうの薫かのする尊みい御厨子ずしの中に、
きりり晃然と輝いたのは、妙見宮みようけんぐうの御手の剣おんてつるぎであつた。

一疋びき、ハツと飛退とびしきつたが、ぶつくといいふ調子で、

「お刀けがの汚れ、お刀の汚れ。」と鳴いた。

また氣勢けはいがして、仏壇の扉細目ほそめに仄見ほのみえ給ふ端たま嚴たんごん微妙みみょうの御お
んかんばせ顔。

蠅は内々ないないに、

「観音様、お手よごが汚れます。」

「けがれ不浄ふじようのものでござい。」

「不浄のものでござい。」

と眩つばやきながら、さすがに恐れて静まつた。が、暫時しばらくして一個ひとつ厭いやな声で、

「はゝゝゝはゝゝ、いや、恁こうまた又ものも汚きたのうなると、手がつけられぬから恐るゝことなし。はゝはゝこら、何どうぢやい。」と、ひよいと躍おどつた。

トコトンく、はらりく、くるりと廻り、ぶんと飛んで、座ただは唯蠅おおで蔽おほはれて、果はは夥おびただしい哉かな渦ずまく中に、幼おきなご児は息とまが留とまつた。
 恰あたかも可よし、中ちゆう形がたの浴衣ゆかた、縷しゆう子の帯しゆうす、雪の如き手に団扇うちわを提あげて、店口みせぐちの暖簾のれんを分け、月の眉まゆ、先まづ差さ覗しのぞいて、

「おゝ、大變な蠅だ。」

と姉が、しなやかに手を振つて、顔さわに触さわられまいと、俯うつむ向きな

がら、煽^{あお}ぎ消すやうに、ヒラヒラと払ふと、そよ／＼と起る風の筋^{すじ}は、仏の御加護^{おんかご}、おのづから、魔^まを退^{しりぞ}くる法^{ほう}に合^あつて、蠅^どの同^う勢^{せい}は漂^うひ流れ、泳^うぐが如^{ごと}くに、むら／＼と散^ちつた。

座^ざに着^きいて、針箱^{はりばな}の引^ひ出^だから、一糸^{いっし}其^{その}の色^{いろ}紅^{くれない}なるが、幼^{おさなご}児^ごの胸^{むね}にかゝつて居^ゐるのを見^みて、

「いたづらツ児^こねえ。」と莞^{にっこり}爾^に、寝^ね顔^{がほ}を優^{やさ}しく睨^{にら}むと、苒^{いちご}が露^{つゆ}に艶^{つや}かなるまで、朱^{しよ}の唇^{くちびる}に蠅^はが二^{ふた}つ。

「酷^{ひど}いこと！」と柳^{りゅう}眉^{まゆ}逆^{さか}立^{たち}、心^{こころ}激^{げき}して団扇^{うちわ}に及^{およ}ばず、袂^{たもと}の尖^{とさき}で、向^{むか}うへ払^はふと、怪^{あや}しい虫^{むし}の消^きえた後^{あと}を、姉^{あね}は袖^{そで}口^{くち}で噛^かんで拭^ふいて遣^やりながら、同^{どう}じ針箱^{はりばな}の引^ひ出^だから、二^{ふた}つ折^{をり}、笹^{ささ}色^{いろ}の紅^{べに}の板^{いた}。

其れを紅差指べにさしゆびで弟の唇に。

一寸ちよいと四辺あたみをまわして又唇に。

花の薫かおりが馥郁ふくいくとして、金坊きんぼうは清々せいせいして、はツと我に返つ

た。あゝ、姉が居なければ、少くとも煩わづらつたらう。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成」 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「文芸界」

1901（明治34）年6月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※初出時の表題は「部屋の弟」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蠅を憎む記

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>